第三　東洋の國語學

文學博士　木村正辭

國語といふものは此上も無い大切なもので、此言語が無ければ平常吾人相互に意旨を通ずることが出來ずして、其不自由なることは恰も手足の無きと同じことであります、又此言語に次では文字であります、言語ばかりありても文字なければ、其事柄を永く後世に傳ふることが出來ぬ、言語と文字とが有て始て其世々々の事柄が後世に傳ふることが出來ます、これが傳はらなければ、其國の成立のことも、又我我が祖先などのことも知られず、之を知らざれば、國を遵奉するの心薄く、祖先を慕ふの念無し、故に其國體を鞏固にして、人民に愛國心を起さしめんには、國語國文を維持し、普く國內に布敎するに及(シク)は無し、是れ洋の東西を問はず各國此學を主張する所以であります、

吾皇國にても上古は國語を大切にしたりしことは、今世に傳る諸の祝詞、(これは神に申述るものなるから殊に麗はしき國詞を用ゐられたり)又天武天皇の勅語に係る、古事記の一書全く國言を以て代々の事蹟を記されました、又續日本紀に載せたる詔詞は前後の漢文なるにも拘らず、皆國語を以ての給はせ給へり、上古は如此國語を尊びたることであります、

しかるを中古以來漢學盛んになりたるより、國語は漸々滅じて、平常の言語及書記するものも、漢語を多く用ゐることゝなりたるなり、其頃のありさまを追想するに、少し漢籍にても讀たる人は力(ツト)めて漢語を交へつかひたりと見ゆ、それは彼源氏物語帚木卷に、或博士の女に通ひたりし事を記して、其女のさまをかたれるところに、せうそこぶみにもかんなといふものかきまぜず、うべ〳〵しくいひまはし侍るといひ、又男ある時其女をとひたりしに、女外邪に冐され居たりしかば、物ごしにてあひて其男にいへる詞を載せて云、月ごろふびやう(風病)おもきにたへかねてごくねち(極熱)のさうやく(草藥)をぶく(服)して、いとくさきによりなん、えたいめんたまはらぬ、まのあたりな

らずとも、さるべからんざふじらはうけ給はらんと、いとあはれにうべ〳〵しくいひ侍りとあります、之をみれば其頃の女學生も隨分珍文漢(チンプンカン)の語をつかはれた事と見ゆる、此一條にても一寸其頃のありさまがしられます、但し源氏物語の優美なる前後の詞の中に、此漢語のまじりて、何となくあら〳〵しくきこえだるは、漢語の日本語に劣れることが、わかります、

かくて後元祿享保頃に至りて、契冲眞淵宣長などの先生だち、大に吾國の復古の學問を起して、言語文章の亂れたるなどつぎ〳〵に改め正したるによりて、中世以來の弊風をためたりしも明治の御代にいたりて西洋學大に行れ、これが爲め國文國語の學びは殆ど地に墜たるありさまとなりたり、しかるに此一兩年人々其非をさとり、國文國語の學も再び世に出る事とはなりました實に喜ばしき事なり、但し西洋心醉の人は此國文國語の學の起りしは、西洋にて國文國語を貴重し、之を維持する事の盛なるによりて、我日本にてもこれを興隆せんとするなりとおもへるがあり、これ甚誤れり、其よしは上にもいひたる如く、我日本にては素より國語國文を貴重したりし事なり、又古語に言靈の幸はふ國言靈の助くる國といひて、自國の言語

を此上なき尊き物とおもひ、自負したるなどをも見るべし、

さて支那もまた上古は國語學なる事を辨せんとす、先爾雅といふ書ありて周公の作る所にして、仲尼之を增加し、又子夏之を增益せりといひ傳へたり、而て此書全く國語を敎ふるの爲に設けたるものにて、其內周公の作れるなりといふ釋詁の部は古言と今言との違ひあることを釋き、其仲尼子夏の增益したりといふ釋言の部は古今の間四方の言の通じ難かりしものを釋きたるなり、大戴禮に孔子敎魯哀公學爾雅、といふこともあり、これ支那も上古國語の學を專務としたる也、又漢劉熙が釋名八卷あり、訓詁の學に就て大に發明する所あり又揚雄が撰なりといひ傳ふる方言といふ書十二卷あり、これは揚雄が五方の國々に至りて其所々の言語の異なるものを聞集めたるものであります、又魏張揖が撰たる廣雅といふもの十卷あります、これも前に申したる爾雅と同じ樣なるもので、國語の釋の書でありますまた漢代までの儒者だちの經書の註は、訓詁を專とせしを、宋儒の時に至りて、多く義釋の書を著したり、かくて元明二代の間は別に名家もなくて、學術も進まざりしが、淸に至りて、大儒先生も多く出て、復古學を唱へしより、かの訓詁の學盛りになりました、

如此なれば支那もとより國語學を尊ぶ國なることは論なしかゝれば東洋の國語學は最古き代よりの事であります、

抑言語は國家重大の關係を有すものにて、一國の基礎は之に依て立ち國民の愛國心は之に依て成る、近頃西洋にては古言學盛に行れて、之を歴史學中の緊要の學とせりといふ殊に我國の言語は萬國に隔絶したる言語にて、其用法は他國に勝れたること萬々なり、且詞に古今の變遷はあるも用法に於ては神代より今日に至るまで變る事がありませぬ、しかるを世人は多く此語法を知らずして、人々勝手次第なる語法を以て文章を作り出し自他混淆詞の時錯雜して、文義通せざるにも拘はらず、自ら得意然たる者が多きやうに見えますが、此國に生れて此國の言語の用法を知らざるは、法律上にては日本人たるの資格を有すと雖天然の資格に於ては、日本人たるの資格なきものといふも過言にはあらざるべし、豈歎息の至ならずや、

凡言に古言あり今言あり雅言あり俗言あり方言あり、此五類のもの一つも廢すべからず、又知らざるべからず、いかにとなれば古言を知らざれば、古書を解する事能はず、雅言を知らざれば中古の書を解すること能はず、今言俗言の知らざるべから

ざるは論なし、又方言を知らざれば草木鳥獸其他の名目等の事に於て、學術上は勿論平常と雖ども不便なる事多くあります、これ前に申したる支那にて爾雅廣雅方言等の書の著述ありしわけなり、しかるに日本にはいまだ如此の書の撰述はあらぬ、明治の初年政府は吾輩五六名の人をして語彙といふ書の撰述を命せられましたが、僅に十巻ばかりも出來したる頃、其擧を廢せられました、甚遺憾な事であります、

かくて言語の原の成立を考ふるに、音響より出たるもの多きやうにおもはれます、その音響より出たるに凡四類ほどあります、

第一は鳥獸の聲をうつす

第二は人の聲をうつす

第三は萬物の聲をうつす

第四は物の形有樣等をうつす

以下證に出すもの、おもひ出るに隨ひ和漢取交へて示す、

○鳥獸の聲をうつせるは

鶴（○つる　音クワク）
日本人はつる〳〵と聞き漢人はクワツ〳〵とき〻たるなり、

鴉（○からす　音ア）
す。は多く鳥につけていふ言、から。は今俗のカア〳〵に同じ漢人のア。はアー〳〵とき〻たるなり、悉曇家にてはア。カ。同用とて通ずる聲なり、

雁（○かり　音ガン）
かり〳〵とき〻たるなり、音のガン符合す、

雉（○きゞし　音チ）
今人ケン〳〵といふ古はキン〳〵とき〻たるなり、音のチも同韻にて通ず、

杜鵑（○ほとゝぎす　音トケン）
漢名不如歸と符合す、今俗はホゾンカケタカと鳴といふ又テッペンカケタカともいへり、

鷄（○かけ　音ケイ）
催馬樂譜に、かけろとなきぬとあり、音のケイ符合す、

雀（○すゞめ　音ジヤク）
古へしゆ〳〵とき〻たるなるべし、しゆ。の急言す。なり、め。は鳥につけていふ言、音のジヤクとしゆと符合す、

馬聲（イ）
萬葉に馬聲の二字をイの假字とせり、今もいな〻く又いばゆともいふ是也、

蜂音（ブ）
萬葉に蜂音の二字をブの假字とせり、宇治拾遺に蛄（アブ）一ッふ。めきて、かほのめぐりにあるをうるさければとあり、ふ。めくは聲をうつしたる言なり、○音のボウ符合す、

牛鳴（ム）
萬葉に牛鳴の二字をムの假字とせり、支那の字書に牟（ム）は牛鳴也とあり、倭漢全く同じ、

追馬（ソ）
○人の聲をうつせるは

萬葉に追馬の二字をソの假字とせり、今人はシーといふ、ソとシと同音なり、

喚鷄(ツヽ)

萬葉に喚鷄の二字をツヽの假字とせり今人はトヽと呼ぶ、ツとトと同音なり、支那にてはシユ／＼と呼ぶなり、字彙に喌(シク)支六切、呼鷄重言之聲とあり、

哈 ○すゝる 音サフ

すゝは呑音をうつせるなり、音のサフも符合す、

咬 ○かむ 音カウ

かむのかは物を食ふ音なり、音も同じ、

又宇治拾遺に、僧どものかき餅を食ふことをいひて、ひしひしとたゝくひに食ふ音のしければ、ともあり、ひし／＼は今人のビユシヤ／＼食ふなどいふ是也、

かくて笑ふ聲をうつしたるに種々あり、

阿々 日本紀の私記に咲聲也とあり、

ゑら／＼ 日本紀に見ゆ、

は

宇治拾遺に人みなは。とわらひけり、

きやら／＼ ゑい／＼

宇治拾遺に、ある人仲胤僧都にかゝることこそありしかとかたりければ、仲胤僧都きやら／＼とわらひて、これはかう／＼のとき仲胤がしたりし句也、ゑい／＼とわらひて、大かたはこの頃の說經をば、犬の糞(クソ)說經といふぞ、犬は人の糞を食てくそをするなり、仲胤が說經をとりて、此頃の說經師はすれば、犬のくそ說經といふなりといひける、

む、 源氏末摘花に、とのたまへどたゞむ。む。とうちわらひて、いと口おもげなるも云々、これは少し笑さま也、

をい／＼ これも宇治拾遺にみえたり、

○萬物の聲をうつす

こをろ

鉾を以て潮をかきまはす聲也、

かわら

水中の鐙に鉤(カギ)の觸れたる聲也、以上古事記にみゆ、

さやぐ
木の葉に風のあたりたる聲也常にさわぐなどいふも同語なり、

ふたり
宇治拾遺に、(鼻長の僧のかゆをすゝる所に、)鼻もたげの木ゆるぎて鼻はづれて、かゆの中へふたりとうちいれつ、

はた〳〵
同書に戸をはた〳〵とたゝけるに、

たゞ〳〵
同書に、たゞ〳〵とはしり出られたり、(足音なり)

つぶり
同書に此わたし舟に、廿餘人のわたるもの、つぶりとうち返しぬ、

こそ〳〵
こそろ
同書に、くちなはのゆくまゝにひかれてゆけば谷より峯のうへざまに、こそ〳〵とのぼりぬ云々、蛐はこそろとわたりて、むかひのたにゝわたりぬ、

ごほ〳〵　雷の聲
源氏夕顔に、ごほ〳〵となる神よりもおどろ〳〵しくふみとゞろかす、からうすのおとも云々、今人はごろ〳〵といふ、

ふた〳〵　扇をつかふ聲
枕册子に扇引ひろげてふた〳〵とうちつかひて、

〇物の形有樣をうつせる聲

これは所謂形狀言、しく。しく。し。しき。と活用する詞、暑し寒し淺し深し善し惡しの類、又物の色をいふ詞、赤し青しなどのあつさむふかあさなどいづれも其物其意の形をうつせるなり、此他と、受けたる詞に多しさ。と吹風つ。と入るなどいふ、皆是也、如此言語の原は各國共に音聲より出たるもの多きに居るなるべし、故に其言語の異域と符合せるものと多し、今聊其例を示さむ

雁 かり 音ガン　　金 かね 音キン　　郡 こほり 音グン　　君 きみ 音クン
絹 きぬ 音ケン　　夜 よ 音ヤ　　麥 むぎ 呉音メキ　　越 をち 呉音チチ

巣 音す 音サウ　死 音し 音シ　氣 音き 音キ　似 呉に 音ニ
蟬 音せみ 音セン　錢 音ぜに 音セン　剝 音はぐ 音ハク

以上は、倭語と支那語と符合せるなり、此外猶いくらもあり、

以下は、倭語と梵語に符合せるものを擧ぐ、

唐、玄應一切經音義云、迦迦羅是烏聲也、迦迦此云烏とあり、此方のからすと全く同、

同書に、究究羅、是鷄聲也、鳩鳩吒此云鷄とあり、日本語のかけろと符合、支那音のケイとも合へり、

梵語雜名に、天（素羅）とあり、日本語のそらと全く同、

同書に、雉、（底々羅）とあり、支那音チと合

同書に、狗、（俱々羅）とあり、支那音クと合

翻譯名義抄に、髀（ヒ）卑（リ）履此云蟻子とあり、本邦にて蟻蛾をひゝると云に符す、

此他猶いくらもあり、

日本語には濁音といふ事が大切なり、濁ると濁らざるとにて、其語の意反對するなり、古今集哀傷に、

ねてもみゆねでも見えけり大かたはうつせみのよぞ夢にはありけるといふ歌あり、はじめのて。は清みて、ねること次ので。は濁りてねぬ意なり、これは敏行朝臣の身まかりたるとき、友則朝臣のよみたるにて、世の中はすべて夢のやうなるものなりと歎きたるなり、こゝにおかしき噺あり、舊幕の時塙檢校保己一といふ盲人の學者がありましたが、此人幕臣某に從て信濃へゆき、姨捨山の麓に至りたる時、某が檢校に向ひて云やう、此は有名なる姨捨山なるぞ、歌一首詠じ給へといひければ、檢校傍らなる人にかゝせて差出したるを、よみ見れば、

我心なくさめかねつ更級や姨捨山にてる月を見て

とあり、これは古今集雜部に載たる歌にて姨捨山といふ名につきてあはれを感じて、てる月を見てもなぐさめかぬとよめる歌なり、かの某氏これを見て、檢校に向ひ吾不學と雖とも、この古歌なる事はしりたり、吾望むは古歌にあらず、其方（ソナタ）の新詠なりといひけるとき、檢校答けるやう、その歌古歌にあらず、全く吾新歌なり、古歌なるはてもじ清てよむべきを吾歌はてもじ濁るなりと答へしとぞ、てもじ濁ればやがて盲人の歌となるなり、此檢校時にとりての方便おもしろし、又古歌に、

庭の雪に我跡つけて出にしをとはれにけりと人やみるらん

此歌て。文字は文字を濁れば狂歌となるなり、跡つけずして出たるをみて、飛越たと見るであらんといふ意になります、

古今著聞集に、蒔繪師が文に、こもちまきかけてと書しは、御物蒔かけの意なるを、男女の交接することをまくといふによりて子持交接かけの義と取違へたることゝあり是日本語の清濁は大切なるものであります、但し田舍語は濁音が多いであります、故に諺にびるばちどんぼうがにがへるといふ事は田舍語を評したるものであります、但し此田舍語所謂方言も一應心得て置かねばならぬが方言にはわからぬことがおほくあります、あるものに土佐辭をよめる歌とて、

けゑ〱と、ちふはわこらはゑずらしや、ぜじやうしやうちく、
よんべきたちく、

これを釋すれば、けゑ〱はこれ〱と人を呼辭、ちふはといふ、わこらは吾子等、ゑずらしやはいやにおもふ也、ぜじやうは物體の意、しやうちくは精盡るにて倦む事、よんべは昨夜、きたちくは來たといふ意也、又奥州辭の歌、

いぐひすや、初音ぶんだせ、きくべいに、あせかなかない、ぶさただんべい、これを常の歌に直してみれば、

うぐひすよ初音きかむとまつ宿をよそになしつゝなどかきなかぬ、まづこんなものになります、隨分方言をしらぶるは困難な事であります、右の歌辭を見たなら言文一致の説を唱ふる先生だちも多分閉口するであらうとおもひます、

これは少し御話が横道に入たやうでありますが、これも國語學の一部分でありますから、御話いたしました、今日はこれにて止まして跡は後會に申しませう、

第四　國語科を論ず

池邊義象

普通教育に於ける國語科の事については、余は屢々論述せしことありしが、こゝにまた一篇の意見を公けにせざるべからざる事となりぬ、そは何ぞといふにこの科をいまだ漢文の附屬のやうに思ひ居るものと、專ら古文をのみ研究するものと思ひ居るもの、多き事是なり、

國語科とはその文字の如く、われ〱國民の言語、その言語をうつすべき文章を研